

異世界転生騒動記

10

高見梁川

Takami Ryousen

ILLUSTRATION: りりんら

アウレリア大陸

ノルトランド帝国

ガルトレイク王国

アソサラー王国

マウリシア
王国

ハウレリア王国

教皇領

アントリム

● キヤメロン

● コルネリアス

ケルティマス王国

テネドラ公国

ネドラス王国

モルネア王国

サンファソ王国

ケネストラード王国

ミリアーナ

リガ

カティス

カティロス王国

トリストヴィー公国

マルマラ海

マジョルカ王国

● コンティネッリ

マルベリー

ホートベック王国



マーテル・ブラインド

エウロバ教団特別
矯正部の情報員。
「王門」所有者の
抹殺を目論む。

セリーナ

旧サバラン商会の
女会頭。経済面から
バルドを支える。

**ギッツェ・
マンネルハイム**

ノルトランド帝国軍の
騎兵総監。獣人族の
援軍を指揮する。

ヴァレリー・オスト

トリストヴィーの内乱を陰で操る老人。
ある目的のため、バルドと対立する。

**アウグスト・
ガリバルディ**

トリストヴィー海運
ギルドの若き長。
実の父親はヴァレリー。

シルク・ランドルフ

騎士学校時代のバルドの同級生。
亡き母はトリストヴィーの王族。

**ミハイル・
カラシニコフ**

アンサラー王国軍の
右将軍(ナンバー3)。
個人の武に優れ、
数々の功績を挙げる。

**バルド・アントリム・
ゴルネリアス**

本編の主人公。
雅晴と左内の魂を有する。
獣人の血とトリストヴィー王家
の血を引く。



第一章

援 軍 到 着

《その他の登場人物》

岡左内^{おかさない} …………… バルドの^{しゅせん}前々世。守銭奴の戦国武将。
岡雅晴^{おかまさきはる} …………… バルドの前世。現代日本の高校生。

セイルーン …………… バルドの婚約者。幼なじみの侍女。
レイチェル …………… バルドの婚約者。元はマウリシア王国の第二王女。

ウラカ^{ネグロトルメンタ} …………… マジオルカ王国の海軍卿。「漆黒の暴風」と呼ばれる。
サツキ …………… ガルトレイク王国の巫女姫。猫耳族の戦士。

イグニス・コルネリアス …………… バルドの父。武勇に名高い辺境貴族。
マゴット・コルネリアス …………… バルドの母。最強の傭兵。
ナイジェル …………… バルドの弟。マルグリットとは双子。
マルグリット …………… バルドの妹。ナイジェルとは双子。

ジーナ・ビョルク …………… マゴットの祖母。獣人族の軍神。
ラミリーズ …………… バルドの曾祖父の元家臣。バルドに忠誠を誓う。

ウェルキン五世 …………… マウリシア王国の国王。
ウィリアム …………… マウリシア王国の第四王子。バルドの学友。

トーマス …………… ダウディング商会の副会頭。セリーナの商売相手。

ホセ・リベリアーノ …………… サンファン王国の海軍卿。知略に富む。

ジャック・アマーディオ …………… トリストヴィー^ス公国を統べる大公。
ベルナルディ …………… ジャックの嫡男。公国の公太子。
オルテン・ヘルカントス …………… 公国の大將軍。ラミリーズの旧友。
シルヴァ …………… オルテンの右腕。参謀として活躍してきた軍人。

ヴァレリー・オスト …………… 公国に君臨する陰の実力者。
イズン …………… ヴァレリーの妻。ノルトランド帝国出身の犬耳族。
バルバリーノ・ザナリデッリ …………… 七元老の一人。ギルド艦隊司令官。

スミノフ・スタンリー …………… アンサラー王国の軍人。ミハイルの副官。

「なんと、まだ強い者がおったのか？」

模擬戦後の晩餐会^{ばんさんかい}で、マゴットの不在を知ったアンサラー王国の將軍ミハイルは、本当に悔し^{くや}うに唸^{うな}った。

「あれはもう、強いとか弱いとかそういう問題じゃなくてですね……僕も反則を出さないと勝てませんし」

理不尽^{りふじん}を絵に描いたような母を思い出し、バルドは困ったように笑う。

「やはり手札を隠しておったか」

死闘と呼ぶに相応^{ふさわ}しい人外の戦いであつたのは疑いない。

だがともに拳を合わせた二人には、お互い手加減こそしていなかったが、全力でなかったこともわかつていた。

「――そちらこそ」

どこか諦念^{ていかん}すら感じさせる表情でバルドも薄く嗤^{わら}った。

ミハイルにも何か隠された切り札があるらしい。二人は不敵に笑い合つてコツンと杯^{さかずき}を鳴らすと、ワインを喉に流し込んだ。

「ちよいといいかい？」

「――ほう」

声をかけてきたジーナの尋常^{じんじょう}ならざる武力を感じ、ミハイルは小さく感嘆の声を上げる。

見事な鍛えようと言うべきだった。

ミハイルは生涯現役^{しょうがい}を口^{くち}にしているが、自分がジーナと同じ年齢で、これほどの武力を残している^られるかは微妙に思える。

また、今戦つて負けるとは思われないが、絶対に勝てるとも断言できなかつた。

「ジーナ様、將軍に何か？」

ジーナが口を挟^{はさ}んできたことに軽く違和感を覚え、バルドが尋ねた。

「なるほど、あなたが『ヘルシングの雷鳴』^{らいめい}殿か」

「今はどこにでもいる、ひ孫が可愛いおばあちゃんさ」

「いやいや、こんなおばあちゃんがどこにでもいたら怖いから！」

バルドとミハイルの言葉が期せずして重なった。世の平凡なおばあちゃんに喧嘩^{けんか}を売^かるがごとき暴言である。

「失礼な。こんなに無害で優しいのに……まあいい。ちよいと聞きたいのさ。ミハイル將軍はどこ^{どこ}の生まれだい？」

「カディロス王国の外れだが？」

「ほう……カディロス王国ねえ」

カディロス王国はネドラス王国の南、トリストヴィー公国の西に位置する。

自然環境が非常に厳しく、国土の北と東を峻険な山岳によって守られているため、排他的で独自の文化を持つことで知られている。

人口はトリストヴィー公国の三割にも満たないが、山を熟知した山岳民族が過半を占め、獐猛で優秀な兵士が多い。

うま味のない痩せた国土と、戦えば厄介な軍事力があるという要因から、これまで国際政治に登場する機会は少なかった。

そのためジーナの獣人ネットワークでもカバーしきれず、カディロス王国にどの程度獣人がいるのかは不明だった。

「ちよいと村で揉めて、幼いうちに飛び出して傭兵になった。カディロスでのことはほとんど知らん。極端なことを言えば親父の顔も知らんのだ」

「それじゃ、自分の血統についてはわからないのか」

「親父が貴族で、母が妾であることぐらいだな。母はどこにでもいる農民の出だったはずだ。屋敷に奉公に出て、勉強して薬学を学んだようだ」

「もし差し支えがないならば、その貴族の名を聞いても？」

バルドはジーナが何を知りたいか察していた。だからいささか無礼に思われる質問も、掣肘しようとは思わなかった。

ミハイルが不完全ながら王門を持つ以上、その血統のどこかで獣人の血が混じったことは確実なのだ。

「言ってもわからないと思うが……マイヤーズ男爵ってやつさ。王国の北西部で猫の額みたいな領地を持っている」

「——残念だが聞かないね。カディロス王国に獣人は多いのかい？」

「どうかな？ 少なくとも村で見たことは一度もない」

傭兵になってからは一度も国に戻っていないのでな、とミハイルは肩を揺らした。

塵ひとつも未練などないと身体で表現するミハイルに、ジーナはこれ以上の情報は得られないと思わざるを得なかった。

「カディロスの獣人に知り合いでもいたのか？」

「まあ、ちよいと縁のありそうなやつがいるかもしれないと思ったまでさ」

そう答えながらもジーナは追及を諦めきれなかった。

果たして王門とはいったい何なのか？

根源的な疑問を抱いてしまった以上、その手がかりを探さぬわけにはいかなかったのである。

「見事な戦いぶりだったが、あれは我流かい？」

「ああ、獣と傭兵を相手に鍛えた我流もいいところさ。生憎と教えを乞う余裕もなかったんでね」それはそうだろう。傭兵として戦わなくては食うにも困る有様なのだから、悠長に剣を教えても

らう余裕があるはずもない。

「毎日森で、薬草と食料を集めてくるのが日課だな。森で狼の群れに襲われたときはヤバかった。母が薬師でなければあそこで死んでいただろう」

そう言ってミハイルは豪快に笑った。

自分を卑下^{ひげ}しているわけではない。心から懐かしく、楽しいと思っている笑顔だった。

「敵にしたくないねえ。運がついた男は特に」

ジーナは額に手を当ててため息をついた。

誰だろうとミハイルと同じ境遇に陥^{おちい}れば、まず確実に死んでいる。

本来死すべき運命を乗り越えた男は、例外なく生き残るための運を持つ。戦場ではその運が馬鹿にならないのだ。

実力があり、修羅場^{しゆらば}を知り、そして天運のある男ほど厄介なものはない。

いっそこで殺しておいたほうがバルドのためではないか、と真剣に検討を始めるジーナであつた。

「それにしても、俺にしてみればありがたい話よ。強い敵との出会いほどうれしいことはない」バルド以外にも強敵がいると知って、ミハイルは機嫌^{きげん}よさそうに酒を喉^{のど}に注ぎ込む。

できれば、個人の戦闘力が高い相手がいい。

残念ながら集団戦闘において、自分の指揮力^{しんぱりき}は凡庸^{ぼんよう}にすぎない。

もとより腕つぶし一本でのし上がったのだ。強敵を倒してこそ生きている実感を得られる悪癖^{あくへき}があることを、ミハイルは自覚^{じかく}していた。

戦場で再びバルドと出会ったならば、どれほどの死闘を演じられるかと思うと、今からそれが待ちきれぬほどであつた。

「——ネドラス王国の獣人はそれなりに腕は立つたが、婆様^{ばがさま}にも遠く及ばなかったな。いや、一人厄介なのがいたか」

「ほう、アンサラー王国の悪魔將軍が厄介とは、興味あるね」

この男を相手には王門を持つジーナやサツキでさえ、勝てるとは言いきれぬものがある。

そのミハイルが厄介と言うからには相当な相手に違いなかった。

「狼耳の獣人でな。強いというより賢^{かし}くてやりにくい。こつちが嫌がることを本能的にわかつているような奴だ。確か——ラグニタスと言ったか？」

狼耳族は獣人族の中でも稀少な種族で、犬耳族と猫耳族の特徴が合わさった性質を持つ。

かつては犬耳族、猫耳族と同じくらいの人口だったが、特にアンサラー王国周辺を居住地としていたため、今では絶滅寸前と言われていた。

「なるほど、あれほどの弾圧を受けながら、まだネドラス王国でレジスタンスが活動していられるのはそのせいかな」

「戦って負けるとは思わんが、そもそも戦えない。追っても逃げられるからな。ストレスの溜まる

相手だ。俺はもう願い下げだね」

「それは僕もお会いたいのですね……」

そう言いつつもバルドは苦笑を禁じ得ない。

人柄からして、ミハイルは政治に関する興味も能力も一切ないのだろう。

現に副官が親の仇のような顔でミハイルを睨んでいるのだが、当人はどこ吹く風である。

ネドラス王国には凄腕の獣人がいて、今も健在。

それを唯一掣肘できたミハイルは、もうネドラスにはいない——。

今頃ネドラス王国がどんな情勢になっているのか、非常に興味を引かれた。

少なくともそのレジスタンスと接触することは、トリストヴィー王国にとって不利益にはならない。

「せっかく強いのに、敵と戦わぬ腰抜けに興味はないわ！ その点バルド殿下は素晴らしい。総大将だというのに自ら前線で剣を振るうなど、なかなかできることではないぞ！」

気持ちよく飲んでいるうちにどうやら酔いが回ってきたようで、顔を赤くしたミハイルがバンバンとバルドの肩を遠慮なく叩く。

「ちょ、將軍、飲みすぎですよ！」

「うん？ お前は どうして 飲んで ないんだ？ 飲め 飲め！ まずは かけつけ 三杯だ！」

「のわああつ！ 私は 飲めな……あぐつ！ ががほ……」

「あの……副官さん動かなくなっちゃったんですけど……」

「ならばよしっ！」

酔いつぶれるまで飲まずに何が男だ。そうは思わんか？ 満面の笑みでミハイルに問われたバルドは、今夜はどうやら長くなりそうだと覚悟を固めたのだった。

どつと沸く宴席会場からゆっくりと離れたジーナは、銜いなく豪快に笑うミハイルを遠目に眺めていた。

明日からは敵に戻るというのに、妙に人好きのする性格で、もうバルド以外の面々とも打ち解けている。ミハイルに敵意や悪意が存在しないためであろう。

あれはただ、戦うのが好きなだけの子供がそのまま大きくなったような男だ。

問題はその男が、獣人にとつての象徴であり切り札である、王門を所有しているということだった。

「困った男だ……」

「具合が悪いのじゃ？ ジーナ様」

よく冷えたリングゴ水の入ったグラスをサツキから受け取り、ジーナは豊かな甘みと、疲れた精神が覚めるような酸味を楽しんだ。

「すまないねサツキ殿。まあ、バルドの嫁になるなら、私にとっちゃひ孫娘みたいなもんだが」

「よ、嫁？ か、からかうのはよすにゃ！」

カッと茹^ゆったように顔を赤らめながらも、満更でもなさそうにサツキは身体をよじる。このところすっかり娘らしくなってしまったサツキが、おかしくも可愛かった。

それはそれとして、王門持ちと王門持ちの間に生まれる子がいったいどんな成長をするのかと考えると、また例の疑問が鎌首をもたげる。

——王門持ちはどうのようにして生まれるのか？

人間と獣人の混血に生まれるというのは、これまでの経験則的には間違いない。残念なことだが、純血の獣人で王門を持って生まれた例はないのだ。

これまでは奇跡のような偶然の確率によって誕生するものと思っていた。獣王の再来とも言える王門持ちは、百年に一人も現れないからこそ王なのだ。

ところが現状は、そんなジーナの固定観念^{くつきん}を覆^{くぶ}すものだった。

ジーナとマゴットの二人だけであれば、まだ納得できる。しかしバルドにサツキ、さらにはミハイルまで王門を所有しているとなれば、疑問が出てきて当然だろう。

もしかして王門は珍しくもなんともないのではないか？

そんな問いに突き当たって、ジーナはブルブルと肩を震わせた。

この大陸にうじゃうじゃと王門持ちがいるなど、悪夢以外の何物でもなかった。

もちろんただ王門を所有しているだけではだめで、獣神殿の司祭が正式な解放の手続きをしなけ

れば真の力は発揮されない。

それをしないかぎり、あのマゴットですら中途半端だったし、ミハイルもそうだろう。

果たして彼らの存在を獣神殿が把握できなかったただけなのか？

ふと思いついたように、ジーナはサツキに向かって話しかける。

「そういえば聞いたことがなかったねえ。サツキ殿はどうやって、自分が王門持ちだと知ったんだい？」

「私が王門持ちであるとわかったのは、十歳の時ですにゃ——」

実はサツキは幼いころ、内気で恥ずかしがりやな少女だった。

今も続く「ゝにゃ」の語尾の原因にもなった、当時受けた心理^{トラウマ}的衝撃は非常に大きかった。

現在のサツキからは信じられぬことだが、幼いころ、サツキは猫耳を持たぬゆえに仲間からいじめられていたのである。

偉大^{いだい}な巫女^{みこ}の血を受け継ぐ娘に、猫耳族の象徴たる猫耳がない。

その事実^{じじつ}にサツキは懊悩^{おうなう}し、自分は本当は母の娘ではないのかもしれないと思うと、夜も眠れなかった。

一転してサツキがその懊悩^{おうなう}を振り切るきっかけとなったのは、母サクヤが渡した猫耳のヘッドドレスだった。

他人からすれば他愛のない物でも、それだけで真の猫耳族になった気がしたのである。

精神的な後ろめたさから来る自虐から解き放たれ、たちまちサツキは同年代の子供たちのリリーダーとなった。もとよりサクヤから受け継いだ身体能力は突出しており、年上の悪童もサツキにかれば赤子のようなものだった。

いわゆる肉体言語によって、サツキは不動の地位を築いたわけだ。

「我を崇めるのにゃ！」

「突き抜けすぎるにもほどがあるだろう！」

周囲がそう突っ込んだのも無理はない。

「やはり正義は勝つのにゃ！ 私に逆らう悪は滅ぼされて当然なのにゃ！」

さすがはガルトレイクの巫女姫、と評判が立つまで、そう時間はかからなかった。

十歳になるころには、すでにサツキの戦闘力は大人の戦士と肩を並べるまでになっていた。母サクヤをも上回ろうという成長ぶりに、周囲の期待は否が応にも高まった。

しかし好事魔多しというべきだろうか。

確かに天性の優れた身体能力があるとはいえ、その精神はまだ幼い少女のままにすぎない。限界は唐突に訪れた。

当然のように大人の訓練に混じっていたサツキは、ある日突然、階段を移動中に身体が自分の意



思で動かないことに困惑した。そして次の瞬間には、ふわりと宙に投げ出されていた。

あとで医師に聞いた話では、自分の身体が限界を迎えているのに、精神力で無理やり動いた反動だったらしい。

運悪く階段から転がり落ちたサツキは、四か所もの骨折と全身打撲、そして頭を強く打ったことによる意識障害で危篤状態に陥った。

サツキの訓練を指揮していた隊長などは、死を覚悟した、というより、むしろ自ら死を望んだという。

それほどにサツキの存在は、ガルトレイクの獣人族になくてもならない存在になっていた。

一週間ほども生死の境をさまよった末に、サツキが意識を取り戻したときには、ガルトレイク中の獣人族が歓呼の声を上げたらしい。

「それからすぐのことですにや。母様から私が王門を持っていると言われたのは」

「そうかい……バルドもそうだが、みんなよく命があったもんだね」

まともな生活を営む庶民ならばともなく、ジーナやバルドのように武に生きる者にとって、危険は身近に存在する。

あとほんの少しで死んでいた、そんな瞬間は武人の多くが経験すると言ってよい。

そして、そこで死なないことが天運である。

天運のない人間は風邪をひいただけでも、食事の卵にあたっただけでも死んでしまう。

だが、本気で生死の境をさまよった経験のある人間は存外少ない。

死ぬかと思ったという主観と、死ぬかもしれないという客観は天と地ほど違うのだ。

そこでふと、ジーナの脳裏に閃くものがあった。

（死にかける、あるいは死の間際までいくことが条件なのか？）

考えてみればジーナもマゴットもバルドも、そして先ほど聞いたかぎりではミハイルも、危うく死ぬ状況からギリギリで生還した経験を持つ。

もし死にかけることが王門の鍵となるのなら、確かにその確率は非常に低いはずだった。

（いや、だが足りない）

獣王以来、ほとんど出現することのなかった王門。

その出現条件が人間と獣人の混血であることと、死にかけた経験のあることだけではやはり足りない。

足りないピースがいったい何なのか、ジーナには思いつくことができなかった。

翌朝、ミハイルは意気揚々とマルベリーを出立しようとしていた。

「バルド殿下、次に会うのを心待ちにしているぞー」

「今度は戦場で決着をつけることといたしましたしょう。正直戦わずに済むなら、それに越したことはないのですが」

ガハハ、とミハイルは大口を開けて豪快に笑った。

「それは無理というものだ。俺はたとえアンサラー王国の將軍でなくとも、殿下と戦うことを決して諦めないからな！」

これからバルドの敵に回るということを隠そうともしない。

バルドが少しでも目先を優先する人物であれば、あるいはミハイルを過大に評価していたならば、この瞬間に殺されても不思議はなかった。

現に副官は胃が痛そうにお腹を押さえて俯うつむいている。この男の無茶に付き合っていたら生きた心地がしないであろうと、ラミリーズは密ひそかに同情した。

「やれやれ、世の中には隠れた強者がほかにもいると思うのですけどね」

「残念だが、俺は殿下ほどの強者を知らん。できれば昨晚聞いた、殿下の母上にも手合わせ願いたかったがな」

「アレと戦うのはやめておいたほうがいいでしょう」

マゴットは、バルドですら切り札なしには勝ち目が薄い、根っからの戦闘民族である。

たとえミハイルであっても、隠された何かなしでは蹂躪じゅうりゃんされて終わるはずだった。

あるいはそのほうが、バルドにとってはありがたいかもしれないが。

「オルテンに、くれぐれもよろしくお伝えください」

ラミリーズはミハイルに向け、堂々と胸を張って笑った。

「殿下はよき騎士をお持ちのようだな」

個人戦闘力ではミハイルの圧勝でも、軍の指揮力ではラミリーズが二枚も三枚も上であろう。

しかも、経験を己の血肉にする術すべを心得ている男の目だ。

この手の男を敵に回すと非常に厄介であることを、ミハイルは経験的に知っている。

「自慢の騎士ですよ——その騎士を捨てるような国は滅んで当然。そう思う程度には」

「がっはっはっ！ 確かにこう言ってはなんだが、公国の太子は殿下の爪あかの垢せんを煎せんじて飲むべきだな！」

トリストヴィー公国の公太子ベルナルディは、小賢こざかしいだけで知力も胆力も合格点は出せない、というのがアンサラー王国宰相さいしやうの意見であったという。

海千山千の宰相マラートを疑うという選択肢はミハイルにはない。

あの宰相は、ミハイルが頭の上がらぬ数少ない人物の一人なのだ。

「俺はその馬鹿に手助けして、殿下と戦わねばならぬらしい。実に喜ばしい。まさしく男の本懐である！」

敵意の欠片かけらもない明るい笑顔で、ミハイルはぐっと右手のひらを差し出した。

どこまでも困った戦馬鹿である。

しかしどうやら自分もその戦馬鹿の仲間のようにだ、とバルドも笑ってミハイルの手を握った。二人はお互いに、近い将来命を懸かけて戦うことになるだろう好敵手の顔を見つめる。

ほとんど無意識のうちに口端が吊り上がり、今すぐにも戦いたいという欲求が湧き上がるのを二人は互いに察した。

「なるほど、殿下は俺と同じ病にかかっているな」

「僕はいたって常識人ですよ？ ただ負けず嫌いなだけで」

「とんだ負けず嫌いもあったものだ！」

負けず嫌いの度合いについては、ミハイルも決してバルドに劣らない。

「ならばどちらの負けず嫌いが勝つか、お楽しみというところだな」

「受けて立ちましょう」

そして人騒がせな戦好きの將軍は、ご機嫌で鼻歌を歌いながら帰途に就いたのであった。



「今度という今度は本当に愛想が尽きました！ 転属願いを出しますからね！ もう將軍の気ままに付き合われるのは勘弁です！」

ようやくマルベリーの人々の姿が地平線の彼方に消えたところ、副官は憤然と抗議した。

ある意味残念だが、当然の言い分でもあった。

「といっても、公国遠征の途中で転属が受理されるはずがないだろう！」

「ぎゃふん！」

こちらも至極当然の道理である。

平時であれば、出世には影響するとしても、転属はそれほど難しいことではない。

しかし戦時に、しかも他国にいて容易に転属などできるはずがないのだ。

「そこは協力してくださいよ！ 私がどれだけ死にそうな目に遭ったかわかってるでしょう！」

「生きてるじゃないか」

「死んだら文句も言えないじゃないですか！」

副官は涙目でミハイルに食ってかかる。

「もう嫌だ！ これから戦う相手と模擬戦とか、暗殺犯が狙いやすい酒場で朝まで痛飲するとか！ 巻き込まれる身にもなってください！」

「だから付き合わなくていいと何度も言っているだろう？」

それがミハイルには不思議で、副官を気に入っている理由でもあった。

これまでの歴代の副官は、ミハイルの自殺行為に仲良く付き合うような殊勝さは持ち合わせていなかった。

「仕方ないでしょう！ それが任務なのですからっ！」

どうやら任務を放棄して自分の身の安全を図るという選択肢はないらしい。ある意味ではミハイル以上に不器用で面倒くさい性格と言えよう。

そのくせミハイルのように、持って生まれた力で無理を押し通すわけではないところが恐ろしい。「やはり俺の副官はお前にしか務まらんよ。運が悪かったと諦めてくれ」

「諦められるわけないでしょうが！ 私の人生をなんだと思ってるんです！ あなたの副官をやっているというだけで、お見合いの相手すらいらないんですよ！」

嬉々として剣を振るい、獣人を虐殺したことで知られる戦場の悪鬼ミハイルの副官というと、同じく戦闘狂のように思われてしまう。

とんだ風評被害であった。

「……なんだ、お前結婚したかったのか」

「当たり前でしょう！ 私は三人以上の子供を作って、夫婦仲良く八十まで生きるのが目標なんですから！」

「なんというかその……すまん」

初めて聞く副官の生々しい生の欲求に、ミハイルは心の底から頭を下げた。

「それじゃ命大事にしてくれるんですね！」

「ごめんそれ無理」

兵士の壁に守られて、陣の後方で大人しくしているなどできるはずもない。

百足や猪よろしく、ミハイルには後ろに下がる機能が喪失していた。

「そうだ！ 見合いは世話できると思うぞ？ これでもそれなりに顔は広いからな。軍人に理解の

あるやつも多い。副官なら文句なしだ」

確かにミハイルは恐れられる存在だが、彼を慕う脳筋な軍人もいないわけではなかった。

それに、戦死することを恐れているは軍人など務まらない。特に軍人の家系ではそうした理解のある女性も多かったのである。

「それを早く言ってくださいよ！ この私、スミノフ・スタンリーに嫁を！ 安産型で氣立てのよい嫁をよろしくお願いします」

「なんだ副官、そんな名だったのか」

初めて聞いたという風でコクコクと首肯するミハイルに、再び副官は怒髪天を衝いた。

「やっぱり転属だっ！ 意地でも転属してやるううううう！」

三年來の付き合いで、幾度もの死線を潜らせながら、いまだに名前も覚えていなかったと知ったスミノフは、力の限りに絶叫した。

しかし彼の切なる願いは、誰もミハイルの副官などしたくないという現実を前に、むなしく拒絶される——これもまた当然の成り行きであった。



「まったく何をやっておるのだ。あの低能どもは！」

不機嫌そうにアンサラー国王アレクセイ三世は舌打ちした。

五万という大軍を揃えながらバルドを相手によいところなく敗れた公国に、アレクセイは唾を吐きかけたい思いだった。

おかげでネドラス王国に派遣していたミハイル將軍を、援軍としてトリストヴィーに向かわせなければならなくなった。

それはアンサラー王国としても苦渋の選択だったのである。

ここまでアレクセイが不機嫌を露わにするのは、外面的には鷹揚な君主であることを意識している彼としては珍しかった。

言い替えれば、この場に気を許した人間しかないという証左でもあろう。

「まさかあそこまで懦弱だとは計算違いでしたな」

老練な宰相マラートは国王の言葉を軽く受け流して苦笑した。

アレクセイがこんな愚痴をこぼす場面はそう多くない。ここで自分まで深刻になるのは、精神的にもよろしくないのだ。

「——とはいえ、彼の国から頭を下げて援軍の要請があつたことは、我が国にとって悪いことではありません」

「無論そうだ。しかし公国と小僧を争わせてともに疲弊させるはずが、またまた小僧の圧勝となると面白いはずがあるまい」

すでにアレクセイは、マウリシア王国とハウレリア王国の戦役の際、バルドに思惑を邪魔されている。ここで再びバルドに美味しいところをさらわれては目も当てられない。

「加えて——これだ」

アレクセイは報告書をマラートの前に放り投げた。どうやら愚痴ではなく、本気で苛立っているらしい。

「……ネドラス王国で大規模な反乱、ですか」

「頭の痛い話だ。ミハイルがいなくなった途端にこれとは、アンサラー王国の面目に関わるわ」

「後任のフォークは優秀な男と思いましたが」

「優秀ではあるが、忍耐力は乏しかったようだな。次の人選は考慮しておけ」

「御意」

ネドラス王国のレジスタンスが活発化したのは、ミハイルがネドラス王国を後にしてすぐのことだった。

——幻影のラグニタス。

相手の弱点にしか手を出さず、まるで空気に溶けるように姿を消すことからそう名付けられたレジスタンスは、ミハイルの不在をよいことに、アンサラー王国軍の補給部隊を襲撃した。

簡単に勝てるどころにしか手を出さない。

そう思っていたからこそ、アンサラー王国は補給部隊に一個大隊という破格の護衛を付けていた

のだが、ラグニタスは配下の総力を挙げて賭けに出たのである。

油断していた補給部隊は、これまでの鬱憤を晴らすかのように戦意に満ちたレジスタンスを前に壊滅した。

嫌がらせのような攻撃を続けていても、戦争の流れを変えるためにはどこかで大規模な攻勢に出る必要がある。

ラグニタスはミハイル不在の間隙について、ネドラス王国にレジスタンス有りという狼煙を上げることになったのだ。

それに激怒したのが、新任のフォーク・カツコフ將軍だった。

ミハイルによって鎧袖一触に退けられて以降、抑え込まれていたレジスタンスが攻勢に転じたことで、フォークの面目は潰される形となった。

フォークならば勝てると言われたも同然であるからだ。

もともと苛烈な攻勢に定評のある指揮官らしく、フォークはレジスタンスを追撃するために軍の先頭に立った。

これまでは逃げるだけだったレジスタンスだが、今回に限ってはやる気を出しているらしい。

となれば、ミハイルにも根絶することのできなかったレジスタンスを掃討する好機である、とフォークは考えていた。

純軍事的に見ればフォークの考えは正しい。潜伏するレジスタンスを根絶することは難しいが、

表舞台に立ったレジスタンスを殲滅することは難しくないのである。

しかしフォークによるレジスタンスの追撃は、ネドラス王国の一般市民に過酷な負担を強いるものとなった。

いつの世も軍という存在は莫大な物資を消費する。

その物資は、属国という立場上、ネドラス王国の民衆が負担することになる。

すでに疲弊しきっていた国民にとって、フォークの軍による徴収、そして頭に血が上った兵士による暴虐はもはや耐えられる限界を超えていた。

結果的に見れば、アンサラー王国はネドラス王国の属国化を急ぎすぎたのである。

二世代ほど時間をかけて牙を抜き、緩やかに締め付けを強化すれば、このようにレジスタンスが跋扈することはなかったはずだ。

そこに大国としての驕りがなかったと言えば嘘になる。

しかしアレクセイ三世は、統一王朝の正統として大陸世界にアンサラー王国の力を見せつけるべく、ある程度の損害も折り込んでいた。

よってフォークとしても、レジスタンスの討伐のためには、味方の損害を顧みないだけの余裕があった。

両国の兵力には天と地ほども差があり、敵に倍する損害を受けたところで、アンサラー王国は痛痒にも感じないのだから。